

玄海諸島



土谷 朋子 (つちやともこ)

福岡県出身。大阪大学大学院工学研究科(環境工学専攻)卒業後、大阪府入庁。ドレスデン工科大学(ドイツ)に留学し、環境に配慮したまちづくりを学ぶ。協力隊員に委嘱されて2年が経過。現在、唐津の7つの島の人々と、島が元気になるように手探りで奮闘中。

7つの島を横につないで 個性を見直す



大学との連携事業：めぐりあいらんどプロジェクト。

◆宝は、足下にあった。七つの島を横につなぐ

福岡で育ち、大阪で働く都会暮らしの中で、経済優先の都会の物差しに疑問を持つようになったのが、そもそもものさすをきかして。ドイツ留学中に、自分の暮らす地域に誇りをもって魅力的に暮らしている、経済とは別の物差しを持つ人々に出会い、ドイツだけでなく日本の地域こそ宝が満載で魅力的であることに気がついたのです。帰国して数年後に偶然耳にした「島おこしの人材募集」に惹かれ、「唐津の七つの島」にたどり着きました。

玄界灘に浮かぶ七つの島々は唐津市を取り囲むように立地しています。定期船航路が本土から放射状に延びていてほかの島を経由しないため、島間の情報交流、物流、人の流れが少なく、構造上孤立化していました。着任してまもなく開いたある島での若者会議で

「島の活性化についていうても、この人数だけではどうせ何もできん」という発言を聞き、若者たちの孤独感・無力感を実感



唐津市には本土から0.6～8kmの近距離に7つの有人島がある。面積0.63～4.24km²、人口57～421人、総人口1770人(平成26年3月末現在)



連携事業：からつ七つの島物産展のようす。

島物産展)。七つの島の特産品を一同に集めて唐津市内の山間部である七山の直売所「鳴神の庄」で販売しました。一つの島からは二、三品目しか出せない特産品も七島からとなると二二品目、それに当番制で振る舞いを企画し提供すると、なんとか見栄えのする市になりました。これがなかなか好評で年三回の

しました。たしかに、すぐ側に見えている隣の島に行ったことがない住民が半数以上。一方で各島は主産業である漁業の衰退、少子高齢化、加速化する人口減少など共通の課題を抱えています。隣の島の若者たちと会わせたい、一緒に何かに取り組む体験をしてもらいたい。すぐ近くにおなじ境遇の仲間がいること、仲間たちと喜びや悲しみを共有する素晴らしさを実感してもらいたいと痛感しました。そこで、七つの島を横につなぐ「連携」を取り組みの柱に据えました。

まずは、①〈七つの島での代表者会議〉を定期的に始めました。年に四回程度ですが、各島の区長さんに集まっていただいて情報交換や、連携して取り組む事業の意志決定など行っています。つぎに試みたのが、②〈からつ七つの島物産展〉。七つの島の特産品を一同に集めて唐津市内の山間部である七山の直売所「鳴神の庄」で販売しました。一つの島からは二、三品目しか出せない特産品も七島からとなると二二品目、それに当番制で振る舞いを企画し提供すると、なんとか見栄えのする市になりました。これがなかなか好評で年三回の

定期市として定着しています。さらに、県外（福岡）への出店など、徐々にステップアップを図っています。この市は、出店してくれる島のお母さんたちの「自分たちのつくったものがおいしいといわれた!」「売れた!」といううれしい体験になっただけでなく、隣の島の出店者との楽しいおしゃべり「情報交換」の場となり、「私たちにもやれる、何かしなくては!」と感じあう、よい機会となっています。さらに、「もっと売りたい。売れるものをつくりたい」との思いから、昨年度から各島で本格的な加工所立ち上げなどの具体的な動き「挑戦」が始まっています。加えて、若者や役員でない方々をつなげたいと思い、③〈島対抗スポーツ大会〉を企画しました。年齢構成を考えるとグラウンドゴルフかゲートボールですが、あえてソフトボール大会とし、島の役員さんとは別の幹事さんを立てて開催しました。当日は時化でいちばん遠くの馬渡島からは船が出ないというアクシデントがあったものの、会場となった小川島の小中学校のグラウンドには六島から一〇〇名もの参加者が集まりました。ソフトボールで汗を流し、パーベキュー



連携事業：第1回島対抗ソフトボール大会。

で楽しく交流し、「おもしろかった！ 来年もやろう！」
 とうれしい誓いを立てて、なごり惜しく別れました。ほか
 にも映画をきっかけに島に賑わいの機会をつくる④（鳥シ
 ネマ）や、島の学校の存続の検討として行った⑤（しおか
 ぜ留学視察）（離島留学の先進地・鹿児島県三島村硫黄島の視察）
 など、連携して取り組んでいます。

◆個々の島での取り組み

連携の取り組みを進めていくと、各島の凸凹＝島の個性
 がみえてきます。やはり七つの島々の発展のためには、個々
 の島での取り組みが重要であることは明らかです。そこで、
 個々の島々と大学との連携事業を積極的に始めました。神
 集島しむに九州大学（福岡市）、小川島に中村学園大学（同）に
 入っていただき、それぞれ⑥（廃校を活用したソーシヤル
 ビジネスの提案）（神集島・九州大学）、⑦（小川島の活性化
 への提案）（小川島めぐりあいらんどプロジェクト・中村学園大学）
 という事業を行いました。若者の少ない島に大学生という
 異文化人が入ることにより、島の方々がそれぞれに刺激を
 受け、自分の島を見つめ直し、自信をつけるきっかけにな
 ってくればよいと願っています。

大学との連携事業は各方面から一定評価を受け、昨年度
 の二島に今年度は加唐島かたがら、馬渡島を加え、合計四島での事
 業を計画しています。

◆少しずつでも変化を実感

島で夜の打ち合わせに出席すると、帰りの船がなくなる
 ためチャーター船を手配しなければならず、一回一回の打
 ち合わせにとっても労力とお金がかかってしまいます。また、
 天候にも左右されます。予定していても時化の日は船が通
 わず、動けなくなることも。そして船酔い。これには未だ
 に慣れることができません。でも、もっとも辛いのは、新
 しい事業や挑戦を島の方々にうまく説明できず、理解を得
 られないとき。そんな日は、「シユン」として帰ります。
 ただし、そんな苦労以上に島では励まされることが多く、
 文字通り「泣き笑い」の充実した毎日です。

「島の活性化の成果とは何か？」。明確な答えをまだ持ち
 あわせておらず、自問自答しつつ活動しています。住民の
 方々が島で暮らしてよかった！ 楽しい！ 幸せだ！
 と思う瞬間が少しでも増えること、そして島に戻ってくる
 人、訪れる人が徐々に増えて、島での魅力的な生活が維持
 できるようになればいいな、と考えています。

成果はすぐには出ないもの。ただ、成果とまでいかなく
 ても変化は少しずつみえています。島の方々は、当初は私
 が足繁く島に行きあれこれ動くことに「平ばありがた迷惑」
 的な反応だったのが、最近では見かけると「今日は何しに
 来た？」と声をかけて下さいます。またさまざま提案

各島の人たちからの言葉

●高島（男、50歳代）

土谷さんは、なくてはならない存在です。行政との連絡ごとばかりでなく、島人とのコミュニケーションが素晴らしい。狭い島の中で人間関係ほど濃いものはないのですが、やわらかくスムーズに事を進めてくれる第3の島人。男女を問わず皆慕っています。

●神集島（男、60歳代）

地域おこし協力隊、離島担当。まさに7つの島にとって行政と島々の横のつながり、千変万化の対応ができる土谷女史の存在を各島の誰もが頼れる姉さまと言っています。もちろんわが神集島においてまさざまな行事に、休み返上で先頭に立って頑張っていたでいます。住民から「島に移ってこんね」「空家があるけん、ただでよかけん住まんね」と声をかけられている姿をみます。

●向島（女、50歳代）

役所に来られた当時から、島の発展のため一緒に取り組んでいただきました。土谷さんのおかげで海産物も売れるようになりました。毎月、足を運んでいただき、ほんとうに感謝しております。今後も、ますますの島づくりのため、ぜひとも、あと1年よろしくお願いたします。

●松島（女、40歳代）

土谷さんとの関わりで私たちは変わりました。前進できたと思います。島の役に立ちたい、できることがあれば力になりますといわれ、何もないところから始まりました。商品の販売、イベントにも参加し今までにない楽しさと人との出会いも増え、よい刺激をいただきました。感謝しています。これからも島のために私たちと一緒に頑張りたいですね。

●馬渡島（男、30歳代）

第3の立場から住民以上に率先していただいて、心より感謝しております。私は長い年月故郷である島を離れていた身ですが、島を愛しており島のために協力したいと考えています。それは成功するか成功しないかではなく、何かを実行するということが、まずは肝心なことであり、後世のために、いま私たちにできる住みよい島づくりを一緒に行っていきたいと思います。

●小川島（男、60歳代）

「地域おこし協力隊の土谷です」。明るい声の挨拶から始まった出会い。はや3年目を迎えました。行政とのパイプ役として地域の問題を親身になって考え、指導・助言を繰り返される中で、地域で考え、提案していく大事さを教えていただき、地域を変えていく新しい力が生まれようとしています。

●小川島（女、50歳代）

「からつ七つの島物産展」に参加した時のことです。男の人の中に率先して、「1、2、3」と TENT を張る頼もしい土谷さんの姿をみました。日ごろの土谷さんの穏やかな顔とはちがひ、凛とした島づくりへの情熱、想いを垣間みたようで感動しました。そんな土谷さんの姿勢は、島の中に根づいています。

に対しても、「せっかく提案してくれているんだから、とりあえず挑戦してみようか」という声が、変化に慎重な島の方々の中からも聞こえてくるようになってきました。「からつ七つの島物産展」での島のお母さんたちのささやかな手応え（成功体験）が加工所立ち上げにつながっていること、大学との連携事業を「島が元気になるチャンス」として前向きに取り組んでいただける人が少しずつ増えてきていることなどは、明るい兆しの表れだと感じています。そして、活動していく中で、島外の方々の支援の力の大ささ、大切さ、ありがたさを実感しています。よそ者である協力隊一人では何もできません。島内の方々はもちろん、

市や県などの行政機関やNPO法人、任意団体、大学、マスコミ、個人のボランティアの方々などほんとうにたくさんの方々に助けていただいています。関わっていただく中で「唐津の七つの島が頑張ってるよ!」ということが少しずつ唐津市内、佐賀県内に知られるようになり、ますます多方面の方々から支援していただくきっかけになっています。まわりの皆様の支援はとても心強く、感謝しています。みえてきた少しずつこの変化を、島の方々、支援していただいているまわりの方々と共に感・共感・共歓し、励みにして、これからも楽しく活動を続けていきたいと思ひます。■